

ノウサギの死亡原因について

6月27日から7月9日にかけて、当園で飼育しているキュウシュウノウサギとトウホクノウサギ8頭の死亡が続き、死亡についてのご報告を随時してきましたが、その間も連続して死亡した原因について調査してきました。その結果、兎出血病というウイルス感染症が原因と判明しました。みなさまにはご心配おかけしましたが、生存しているノウサギやカイウサギの感染防止と、ノウサギの展示再開に向け、引き続き対策を強化していきます。

1. 検査結果

(1) 解剖検査

- ・ 初めの4頭は肺出血による呼吸不全で死亡しているため、過剰な興奮・運動があったものと推測→**外敵の影響の可能性を考えた**
- ・ その後の4頭には、同様の傾向は見られなかったが、そのうち1頭には肝臓に感染症を疑う明らかな所見あり→**感染症の可能性が高まった**

(2) 病理組織検査（岩手大学獣医病理学研究室）

- ・ 肝臓における重度の出血壊死、肺のうっ血と出血→**兎出血病を疑う**

(3) ウイルス遺伝子検査（岩手大学獣医微生物学研究室）

- ・ 5頭の肝臓を用いたPCR検査の結果、目的のPCR産物が得られたことから→**5頭全頭がウサギ出血病ウイルス（RHDV2型）に感染していると考えられた。**

(4) 血液検査

検査結果の出た3頭に特定の病気を疑う所見は見られず

(5) 細菌検査

8頭15検体（気管・大腸・肝臓など）の検査の結果、感染症を疑う所見はなし

(6) エンセファリトゾーン抗体検査

検査を実施した3頭で、感染を示唆する抗体価の上昇がみられるが、今回の死亡原因との関連は低いと考えられた。

2. 今後の対策

生存しているノウサギ8頭に加え、飼育場所が離れているカイウサギも、ウイルス感染を疑った時から消毒等の感染防止対策を行ってきましたが、これらをさらに徹底していきます。また、異常の早期発見などの健康管理に努めます。さらに、生存しているノウサギ8頭は、感染の有無を確認するための抗体検査の実施を検討しています。

なお、このウイルスはカイウサギにも感染しますが、これまで当園では発病はなく、徹底した感染防止対策を行っておりますので、通常通り展示を継続していきます。

当初考えられた外敵の影響については、一連の検査結果から死亡原因である可能性は低いものと考えていますが、引き続き外敵防止対策は継続していきます。

参考：ウサギ出血病について

野生あるいはカイウサギの急性かつ致死率の高い疾患で、感染した個体との直接・間接的な接触などにより伝播します。2ヶ月齢以下の若齢ウサギは発症しません。また、感染したウサギは元気消失、食欲廃絶、発熱、神経症状、鼻出血などの症状を示し、数日の経過で死亡します。何も症状を示さず突然死することもあります（致死率は40～90%）。この病気の治療法はなく、感染防止には徹底した消毒が必要です。海外ではワクチンも実用化されていますが、国内では承認されていません。

（農研機構 動物衛生研究部門 HP より）